

病害虫発生予察情報予報第3号(7月の予報)




佐賀県農業技術防除センター

6月1日～8月31日の3か月間は農薬危害防止運動期間です。

農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理を徹底しましょう。

1. 農薬を散布する場合は、風向きなどに注意し、周囲に農薬が飛散しないよう注意しましょう。
2. 水田で除草剤を使用する場合は、一週間程度かけ流しや落水をせずに、止水期間を守りましょう。

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名 ^{注1)}	7月の予想発生量 ^{注2)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病害虫(抜粋)
		平年比	前年比		
水稲(早期)	穂いもち	やや少	並	137~142	
	紋枯病	並	並	143~144	
	斑点米カメムシ類	並	並	161~162 180~183	
水稲(早植え)	葉いもち	並	やや多	137~142	 葉いもちの進展型病斑
水稲(普通期)	葉いもち	並	並	137~142	
	1. スクミリングガイ 今年の発生は多いと予想されるので、浅水管理や薬剤防除等の対策を徹底する。				
水稲(早植え・普通期)	トビイロウンカ	並	並	152~154	 コブノメイガ成虫
	セジロウンカ	並	並	155~156	
	コブノメイガ	並	やや多	159~160	
	1. 海外飛来性害虫(ウンカ類、コブノメイガ) 佐賀県農業技術防除センターのホームページにおいて「海外飛来性害虫情報(トラップ捕獲データ)」、および「トビイロウンカ・コブノメイガ各世代の発生予測図」を随時更新するので、最新の情報を確認するとともに、各地域で発生状況を確認する。多飛来した場合や新世代成虫の密度が高い場合には、その次世代幼虫のふ化揃い期に防除を行う。				
					 同幼虫

作物名	病虫害名 ^{注1)}	7月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
イチゴ (育苗圃)	ハダニ類	並	並	208~209	 ハダニ類
	うどんこ病	やや少	並	198~200	
	苗立枯症 (炭疽病・疫病)	並	並	202~207	
	アブラムシ類	やや多	並	213~214	
<p>1. ハダニ類 本圃での発生を抑えるため、育苗期の防除を徹底する。薬剤防除には、薬剤抵抗性の発達が少ないとされる気門封鎖系薬剤も活用する。ただし、これらの薬剤は卵に対して効果が無いものが多いため、5~7日間隔で計2回を1セットとして散布する。</p> <p>2. 炭疽病、疫病、萎黄病 炭疽病については、約10日間隔を目安とし、親株からの定期的な薬剤防除を実施する（既に発病がみられる圃場では散布間隔を7日程度に短縮する）。立枯性病害（炭疽病、疫病、萎黄病）については、過度の灌水により発病を助長し、水や泥はねによって伝染するため、雨よけや水滴の小さい灌水装置を利用し菌の飛散を防ぐ。また、これらの発病株を認めた場合は、早急に圃場外に持ち出し適切に処分する。</p>					
アスパラガス	茎枯病	やや多	やや多	313~314	 アザミウマ類
	褐斑病	並	並	314~315	
	斑点病	並	やや多	314	
	アザミウマ類	多	多	317~318	
	ハダニ類	やや少	並	318~319	
<p>1. アザミウマ類 発生が平年より多く、また、今後も多発生が予想される。虫見板（約20×30cm）への払い落とし（擬葉部を2~3回叩く）で、成虫が1ヶ所当たり3頭以上認められる場合は薬剤防除を行う。</p> <p>2. 茎枯病、褐斑病、斑点病 晴天日には施設開口部を開放し、通風を図る。各病害とも3週間間隔を目安とし、発生前から薬剤防除を実施する（前年多発生圃場及び既発生圃場、降雨日が続く場合は間隔を短縮）。特に、茎枯病については、降雨時にサイドビニルを降ろし雨の降込みを防ぐとともに、発病茎は見つけ次第、除去し適切に処分する。</p> <p>3. ハダニ類 多発生すると防除が困難となるので、発生初期での防除を徹底する。虫見板への払落としを行い、寄生が認められれば直ちに薬剤防除を行う。</p>					

作物名	病虫害名 ^{注1)}	7月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
果樹全般	果樹カメムシ類	並	並	240~243	
	1. 果樹カメムシ類 飛来状況は地域や園地によって異なるため、園内外をこまめに見回り、早期発見、早期防除に努める。				
カンキツ	そうか病	並	並	209~211	 ミカンハダニ
	かいよう病	並	並	213~215	
	黒点病	並	並	211~213	
	ミカンハダニ	多	多	234~236	
	チャノキイロアザミウマ	並	やや多	229~233	
1. ミカンハダニ 一部圃場で多発生状態が続いている。梅雨明け後もハダニの密度が減少しない場合は、殺ダニ剤による防除を行う。ただし、薬剤抵抗性の発達を避けるため、同系統の薬剤は年1回の使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。					
ナシ	黒星病	やや少	並	279~282	 ナシ黒星病
	ナシヒメシンクイ	やや少	並	293~295	
	ハダニ類	やや少	やや少	298~300	
	1. 黒星病 6月下旬~7月上旬は主要な感染期となるため、DMI 剤を用いた防除を必ず実施する。発生園、常発園または雨が続く場合には、DMI 剤を追加散布する。 2. 薬剤散布時の注意点 スピードスプレーヤーによる散布では薬液が到達しにくい園周縁部等でチュウゴクナシキジラミや黒星病が多発している圃場が散見されている。このような部位をよく観察し、病虫害の発生が確認される場合は、手散布を実施するなどして防除の徹底を図る。				
ブドウ	黒とう病	やや多	やや多	327~329	 チャノキイロアザミウマ
	べと病	並	並	330~332	
	褐斑病	並	並	332~333	
	チャノキイロアザミウマ	並	やや多	339~340	
1. スピードスプレーヤーによる薬剤散布 全列走行を基本とし、薬液が到達しにくい園周縁部等は手散布を実施するなど、丁寧に散布する。					

作物名	病虫害名 ^{注1)}	7月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
茶	カンザワハダニ	多	多	413~414	 カンザワハダニ
	クワシロカイガラムシ	並	並	420~421	
	チャノキイロアザミウマ	やや多	並	419~420	
	チャノミドリヒメヨコバイ	多	多	418~419	
	チャノコカクモンハマキ	多	やや多	417~418	
	チャノホソガ	並	並	416	
	炭疽病	並	やや多い	408~409	
	輪斑病	並	並	406	
<p>1. カンザワハダニ 多くの圃場で発生が見られる。生息部位である葉裏へ薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。また、薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤は年一回の使用とする。</p> <p>2. チャノキイロアザミウマ、チャノミドリヒメヨコバイ 一部圃場で発生が多い。萌芽期～開葉初期に防除を行う。多発生圃では、さらに一週間後を目安に追加防除を行う。</p> <p>3. チャノコカクモンハマキ 各世代の発生時期が例年より早く経過し、発生が多くなると予想される。発蛾最盛期から1週間後頃が適期となるのでこの時期に確実に防除を実施する。</p> <p>4. チャトゲコナジラミ 第2世代成虫発生期は7月上中旬頃である。発生圃では、成虫が見られなくなった頃（7月下旬～8月上旬頃の若齢幼虫期）に防除を実施する。</p>					

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年および前年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年および前年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「[佐賀県病虫害防除のてびき](#)」も参照してください。

II. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去 10 年間）及び前年と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
○ 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、(－)：少発生、(－～±)：やや少発生、(±)：並発生、(±～＋)：やや多発生、(＋)：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（1 ページの予報の概要にリンク有り）。

写真

- 1～4 ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。
6 ページ目以降：定期調査時の各作物の生育状況を掲載しています。

7月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する 7 月の気象条件については、福岡管区気象台発表の 3 ヶ月予報（令和元年 6 月 25 日）を基に、「気温：平年並」、「降水量：平年よりやや多い」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%)及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	3 ヶ月予報における 7 月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	40	30 (26.8℃)	30	並
降水量	20	40 (338.5 mm)	40	やや多

Ⅲ. 7月の予報

水稻（早期、上場地域）

定期調査：12 圃場
調査日：6月17日



定期調査圃場の様子（早期水稻）

1. 穂いもち

【概要に戻る】

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや少ない（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図1参照）
葉いもち発生株率0%（平年2.0%、前年0%）
平年比：やや少（-～±） 前年比：並（±）
 - ② 7月の気象予報
降水量はやや多く、やや多発生の条件（±～+）

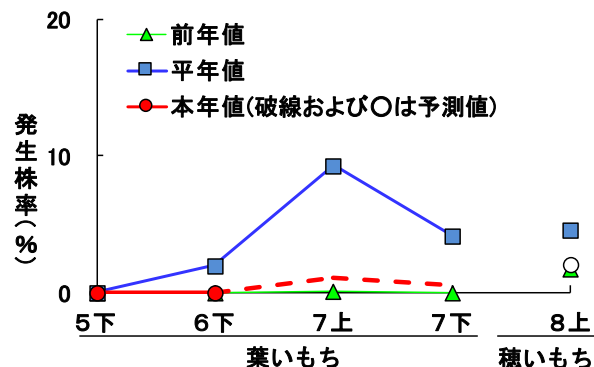


図1 早期水稻での葉いもちの発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 葉いもちの発生が認められている圃場では、穂ばらみ期に穂いもちの防除を行う。葉いもちの発生が上位葉に見られるなど 穂いもちの多発生が予想される場合には、穂揃い期にも防除を行う。

2. 紋枯病

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図1参照）
発生株率 0%（平年0.0%、前年0%）
平年比：並（±） 前年比：並（±）
 - ② 7月の気象予報
気温は平年並で、降水量はやや多く、やや多発生の条件（±～+）

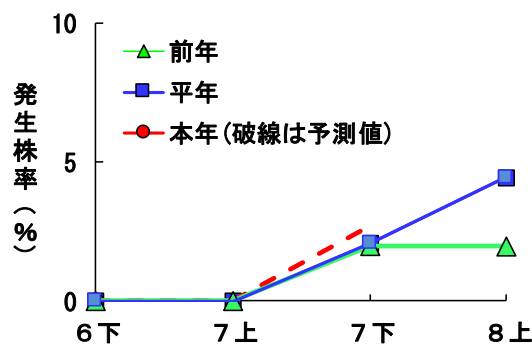


図1 早期水稻での紋枯病の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 早期水稻の出穂期～登熟期は気温が高い時期であり、本病が進展しやすいので、出穂の20～10日前（粒剤の場合は30～20日前）を中心に防除する。
- (2) 薬剤は株元に十分かかるように散布する。

3. 斑点米カメムシ類（クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ類、アカスジカス

ミカメ、ミナミアオカメムシ等）

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) イネ科雑草でのすくい取り調査（6月18日～20日） 発生量は平年並（表1）。（±）
 - (2) 7月の気象予報 気温は平年並で、並発生の条件（±）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 水稻の出穂10日前までに畦畔を含めて除草を行う。
 - (2) 乳熟期（穂揃い期の約10日後）を中心に薬剤防除を行う。多発生の場合は穂揃い期とその7～10日後に薬剤防除を行う。

表1 斑点米の原因となるカメムシ類のイネ科植物におけるすくい取り調査結果

20回すくい取り虫数(2019年6月18~20日)

調査地点	場所	草種	クモハリカメムシ		ホソハリカメムシ		シラホシカメムシ類		アサシカメムシ		ミナミアカメムシ
			成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫
佐賀市川副町	道端	エノコログサ類	0	0	0	0	0	0	5	0	1
鳥栖市三島町	空き地	イタリアンライグラス	0	0	0	0	0	0	38	11	0
多久市南多久町	空き地	イタリアンライグラス	0	0	0	0	0	0	1	0	0
伊万里市二里町	空き地	イタリアンライグラス	6	0	2	0	0	0	35	0	0
伊万里市東山代町	道端	イタリアンライグラス	0	0	0	0	0	0	23	12	0
武雄市橘町	空き地	イタリアンライグラス	0	0	0	0	0	0	164	4	0
鹿島市常広	空き地	エノコログサ類	2	0	2	0	1	0	10	0	0
神埼市千代田町	道端	イタリアンライグラス	0	0	1	0	0	0	5	18	0
吉野ヶ里町	道端	エノコログサ類	0	0	2	0	0	0	21	0	0
白石町福田	空き地	ヒエ類	0	0	0	0	0	0	2	0	0
白石町福富	道端	ヒエ類	0	0	1	0	0	0	13	0	0
白石町新明	道端	エノコログサ類	3	0	1	1	4	0	116	3	0
平均(本年)			0.9	0.0	0.8	0.1	0.4	0.0	36.1	4.0	0.1
前年			0.8	0.4	1.1	0.0	0.1	0.1	10.2	9.3	0.1
平年(過去10年の平均)			1.9	0.1	1.1	0.1	0.7	0.1	22.2	13.2	0.2

水稻(山間早植え)

定期調査: 16圃場

調査日: 6月19日

[【概要に戻る】](#)



定期調査圃場の様子(早植え水稻)

1. 葉いもち

1) 予報の内容

発生量: 平年並(前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査(図1参照)

発生株率0%(平年0.03%、前年0%)

平年比: 並(±) 前年比: 並(±)

(2) 葉いもち感染好適条件出現状況【県内、隣接県 計11地点】

BLASTAMIにおいて、感染好適条件は6月5日に3地点で出現し、準好適条件は6月5日、15日にそれぞれ1地点で出現した(表2)。

(±)

(3) 7月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件(±~+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 葉いもちの進展型病斑(予報の概要の項の写真)が確認された場合は、早急に本田防除を実施する。

(2) 今後のBLASTAMIによる感染好適条件の出現に注意し、圃場における発生状況を確認する(佐賀県農業技術防除センターのホームページを参照)。

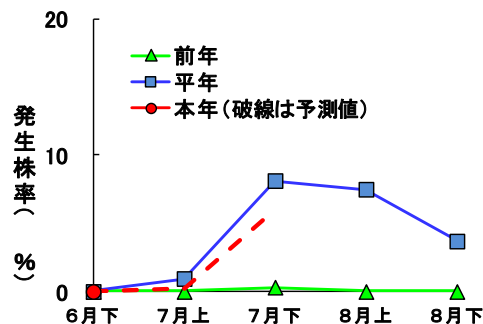


図1 山間早植え水稻でのいもち病の発生推移

表1 BLASTAMIによる葉いもち感染好適条件の出現状況（2019年）

月	日	佐賀					福岡			長崎		
		唐津	伊万里	佐賀	嬉野	白石	川副	前原	大宰府	久留米	松浦	佐世保
6月	1日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	2日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	3日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	4日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	5日	?	10	—	—	10	4	10	—	—	—	—
	6日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	7日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	8日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	9日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	10日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	11日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	12日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	13日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	14日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	15日	—	—	—	4	—	—	—	—	—	—	—
	16日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	17日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	18日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	19日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	20日	—	—	—	—	—	—	—	—	?	—	—
	21日	—	—	—	—	—	—	—	—	?	—	—
	22日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	23日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	24日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	25日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	26日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

- 1：準好適条件（湿潤時間は10時間以上であるが、前5日間の平均気温が20℃未満）
- 2：準好適条件（湿潤時間は10時間以上であるが、前5日間の平均気温が25℃以上）
- 3：準好適条件（湿潤時間は10時間以上であるが、湿潤期間中の平均気温が15～25℃の範囲外）
- 4：準好適条件（湿潤時間が湿潤期間中の平均気温ごとに必要な時間数より短い）
- 10：好適条件（湿潤時間が長く気温も適当で、葉いもちの感染好適条件が出現した）
- ：好適あるいは準好適条件の出現なし
- ？：判定不能

BLASTAMの活用方法

- (1) BLASTAMは、気象条件（アメダスデータ）のみによって葉いもちの発生を予測するシステムである。しかしながら、実際の圃場における葉いもちの発生には、気象条件の外にも、菌の多少（密度）、イネ品種による抵抗性や体質、薬剤防除条件などが大きく関与している。したがって、BLASTAMは、あくまでも葉いもち発生予測の参考資料の一つとして扱う。
- (2) BLASTAMは、葉いもちを対象としており、稲の移植約20日後を起点とした35日間（6月15日移植の場合、7月5日～8月10日）が適用期間とされている。ただし箱施肥が行われた圃場では、その持続期間中はBLASTAMは使用できない。
- (3) 葉いもちは、菌の侵入から発病までの潜伏期間が約1週間である。そのため、BLASTAMによる感染（準感染）好適条件が現れた場合、感染株では約1週間後から初発生あるいは病斑数の急激な増加が予想できる。
- (4) BLASTAMによる感染（準感染）好適条件の出現回数が多いと、その地域の葉いもちの発生面積が増加し、発病程度も著しくなることが予想できる。

水稻（普通期）

定期調査：48 圃場（内 16 圃場は未移植）
調査日：6月17日～20日



定期調査圃場の様子（普通期水稻）

1. 葉いもち

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率 0%（平年0.3%、前年 0%）

平年比：やや少（-～±） 前年比：並（±）

② 定期調査時に、補植用苗でのいもち病の発生は認められなかった。（±）

(2) 7月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 水稻（山間早植え）の項参照

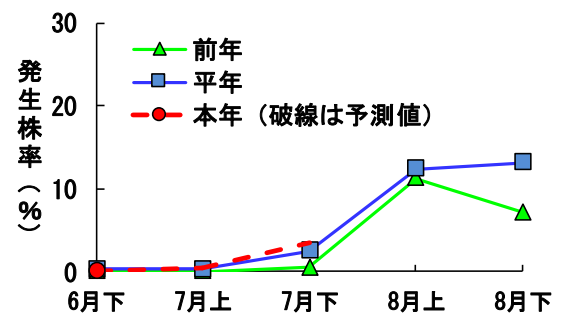


図1 普通期水稻でのいもち病の発生推移

水稻（早植え、普通期）

[【概要に戻る】](#)

1. トビイロウンカ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

- (1) 6月6～7日頃の飛来を確認した。これまでの飛来量は、ほぼ平年並に推移している（表1）。〈±〉
- (2) 今後、梅雨明け頃にかけて、飛来が予想される。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 現時点での発生予測は、図1のとおりである。ただし、今後の飛来状況に応じて本図は随時、更新する。最新の情報は、農業技術防除センターのホームページに掲載する「海外飛来性害虫情報（トラップ捕獲データ」、および「トビイロウンカ各世代の発生予測図」を確認する。

2. セジロウンカ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

- (1) 6月6～7日頃の飛来を確認した。これまでの飛来量は、平年よりやや少なく推移している（表1）。〈-～±〉
- (2) 今後、梅雨明け頃にかけて、飛来が予想される。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 今後の飛来状況に注意し、圃場における発生状況を確認する。
- (2) 早生・中生品種で1株当たり成虫が5頭以上、晩生品種（ヒヨクモチ等）で1株当たり成虫が10頭以上寄生していた場合は、飛来成虫あるいはその次世代ふ化幼虫を対象とした防除を行う。

3. コブノメイガ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

- (1) 6月6～7日頃の飛来を確認した。これまでの飛来量は、平年よりやや多く推移している（表1）。〈±～+〉
- (2) 今後、梅雨明け頃にかけて、飛来が予想される。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 現時点での発生予測は、図2のとおりである。ただし、今後の飛来状況に応じて本図は随時、更新する。最新の情報は、農業技術防除センターのホームページに掲載する「海外飛来性害虫情報（トラップ捕獲データ」、および「コブノメイガ各世代の発生予測図」を確認する。
- (2) 止葉を含む上位3葉への被害を防止するため、多飛来した場合や新世代成虫の密度が高い場合には、飛来あるいは発蛾最盛期の1週間後に防除を行う。

表1 イネウンカ類・コブノメイガのトラップ捕獲状況(2019年6月25日現在)

月	日	トビイロウンカ						セジロウンカ						コブノメイガ					
		佐賀県			長崎県			佐賀県			長崎県			佐賀県				長崎県	
		佐賀市	佐賀市	嬉野市	諫早市	諫早市	諫早市	佐賀市	佐賀市	嬉野市	諫早市	諫早市	諫早市	佐賀市	神崎市	伊万里市	白石町	武雄市	諫早市
		ネット トラップ	ライト トラップ	ライト トラップ	ライト トラップ	ネット トラップA	ネット トラップB	ネット トラップ	ライト トラップ	ライト トラップ	ライト トラップ	ネット トラップA	ネット トラップB	フェロモン トラップ	粘着トラ ップ(20W 蛍光灯)	粘着トラ ップ(20W 蛍光灯)	粘着トラ ップ(20W 蛍光灯)	粘着トラ ップ(20W 蛍光灯)	フェロモン トラップ
6月	1日	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	3日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	4日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	5日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	6日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0
	7日	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	33
	8日	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11
	9日	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	2	11	0	0	0	0	5
	10日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	28
	11日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11	0	0	0	0	0	3
	12日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	0	0	8
	13日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14	0	0	0	0	0	0
	14日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
	15日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	1
	16日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	4
	17日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	1
	18日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	19日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	20日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	21日	0	0	0				0	0	0			0	0	0	0	0	0	0
	22日	0	0	0				0	0	0			1	0	0	0	0	0	
	23日	0	0	0				0	0	0			1						
	24日	0	0	0				0	0	0			1						
	25日																		
6月1~25 日の捕獲 数(本年)		0	0	1	0	3	0	7	0	1	0	2	2	63	0	0	0	0	97
6月1~25 日の捕獲 数(平年)		0.2	0.1	2.9	-	-	-	24.4	4.7	162.0	-	-	-	1.1	-	-	-	-	-

注1) ネットトラップと予察灯(ライトトラップ)は、農業試験研究センターで調査。嬉野予察灯は農業技術防除センターで調査。平年値は過去10年の平均値。

注2) コブノメイガ: 神崎市、白石町、伊万里市、武雄市は防除員が調査。佐賀市のフェロモントラップは農業試験研究センターで調査。

長崎県のデータは、長崎県病害虫防除所提供。平年値は過去10年の平均値。



図1 トビイロウンカ各世代の発生予測

(第1版、2019年6月26日)

1. 6月6～7日頃に飛来したウンカのうち、6月6日の飛来虫を起点とし、有効積算温度と佐賀市川副町の気温データ(6月26日以降は平年値)を基に作成。
2. 6月6～7日頃の飛来虫は、普通期水稻にはほとんど定着していないと考えられる。
3. 今後の飛来状況に応じて、**本図は随時、更新**する。**防除の考え方**等については、**今後の発生予測図の中に記載**していく予定である。これらの**最新情報**は、農業技術防除センターの**ホームページで確認**する。

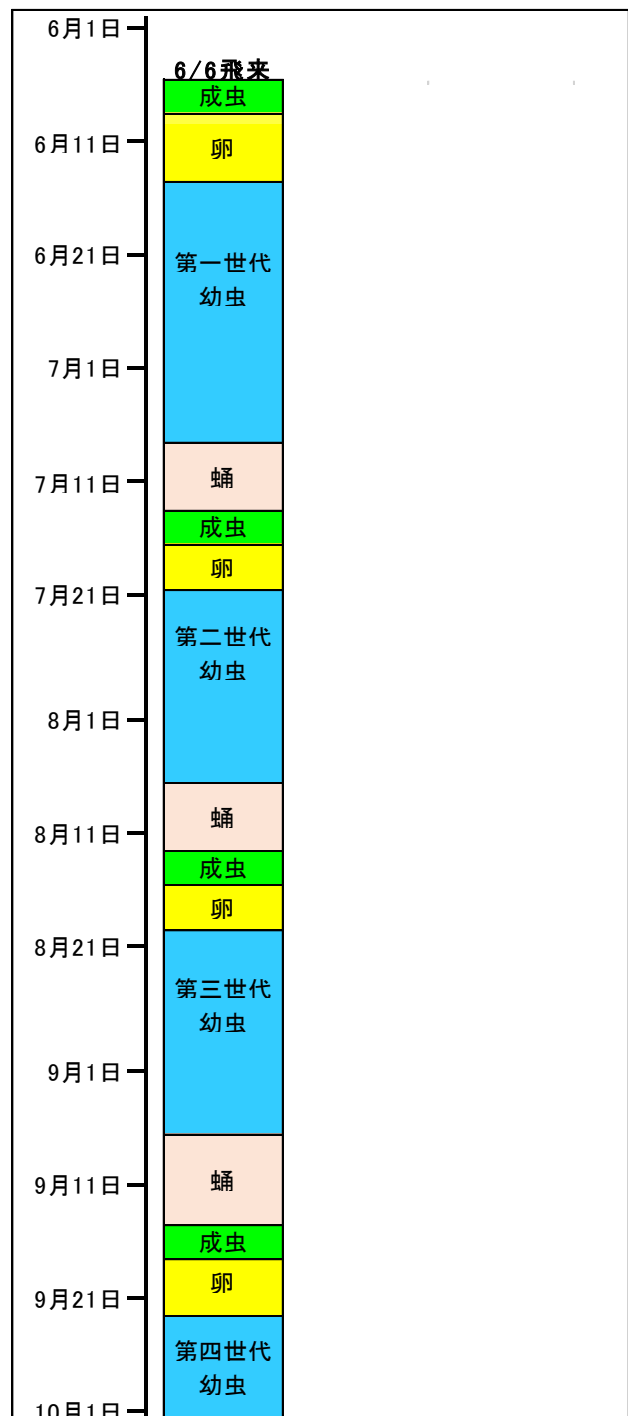


図2 コブノメイガ各世代の発生予測

(第1版、2019年6月26日)

1. 6月6～7日頃に飛来したコブノメイガのうち、6月6日の飛来虫を起点とし、有効積算温度と佐賀市川副町の気温データ(6月26日以降は平年値)を基に作成。
2. 今後の飛来状況に応じて、**本図は随時、更新**する。**防除の考え方**等については、**今後の発生予測図の中に記載**していく予定である。これらの**最新情報**は、農業技術防除センターの**ホームページで確認**する。

イチゴ（育苗圃）

(定期調査 10 圃場)
調査日：6月17～20日



定期調査圃場の様子

1. ハダニ類

【概要に戻る】

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：10.0%（平年7.0%、前年6.5%）

平年比：並<±> 前年比：並<±>

(2) 7月の気象予報

降水量が平年よりやや多く、やや少発生の条件<一~±>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項参照。

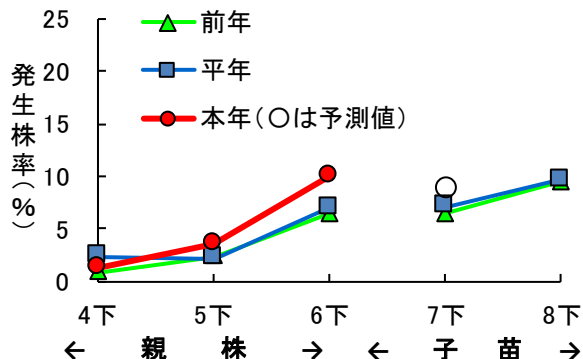


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

2. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：8.8%（平年39.3%、前年34.5%）

平年比：少<-> 前年比：少<->

(2) 7月の気象予報

降水量が平年よりやや多く、やや多発生の条件<±~+>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 定期的な薬剤防除を実施する。

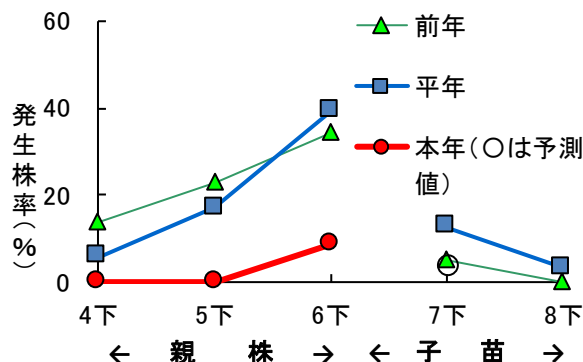


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

3. 苗立枯症（炭疽病・疫病）

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並<±> 前年比：並<±>

(2) 7月の気象予報

降水量が平年よりやや多く、やや多発生の条件<±~+>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 梅雨期は、病原菌の飛散・感染に好適な時期であるため、防除を徹底する。

(2) その他については、特記事項を参照する。

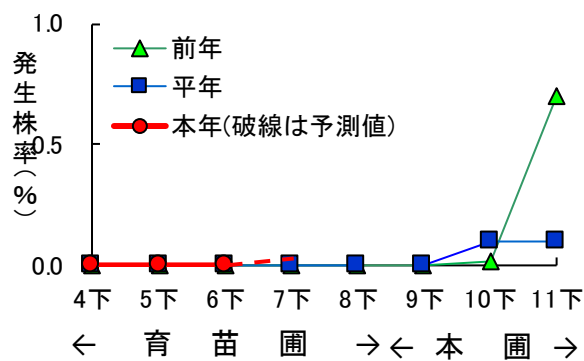


図1 イチゴ立枯症の発生推移

4. アブラムシ類

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①定期調査（図1参照）
発生株率：2.8%（平年1.3%、前年0%）
平年比：やや多（±～+） 前年比：やや多（±～+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 圃場周辺の雑草は本虫の発生源となるため、除草を行う。

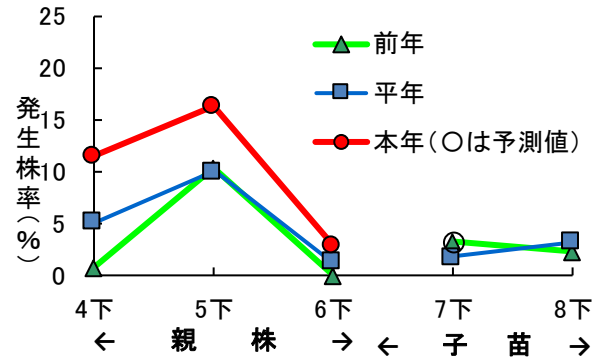


図1 アブラムシ類のイチゴでの発生推移

アスパラガス

定期調査：8圃場
調査日：6月17～20日

1. 茎枯病

【概要に戻る】

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①定期調査（図1参照）
発生茎率：0.3%（平年0.1%、前年0%）
平年比：多（+） 前年比：やや多（±～+）
 - ②7月の気象予報
降水量が平年よりやや多く、やや多発生の条件（±～+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項を参照。



定期調査圃場の様子

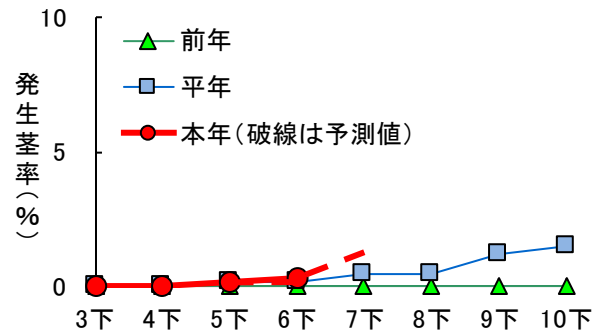


図1 アスパラガス茎枯病の発生推移

2. 褐斑病

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①定期調査（図1参照）
発生茎率：0%（平年0.4%、前年0%）
平年比：並（±） 前年比：並（±）
 - ②7月の気象予報
降水量が平年よりやや多く、やや多発生の条件（±～+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項を参照。

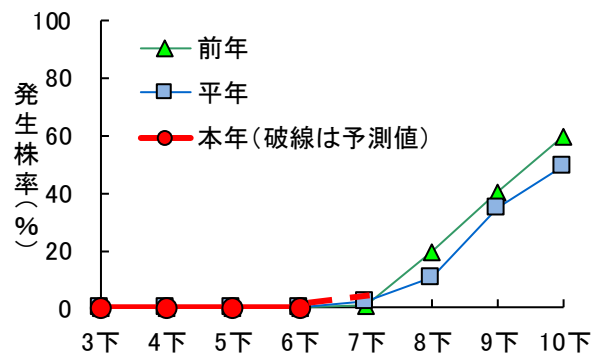


図1 アスパラガス褐斑病の発生推移

3. 斑点病

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年よりやや多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の実況
 - ① 定期調査（図1参照）
発生率：2.5%（平年3.3%、前年0%）
平年比：並（±） 前年比：やや多（±～+）
 - ② 7月の気象予報
降水量が平年よりやや多く、やや多発生の条件（±～+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項を参照。

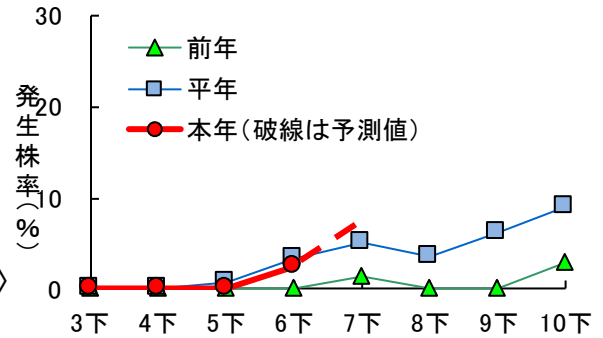


図1 アスパラガス斑点病の発生推移

4. アザミウマ類

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の実況
 - ① 定期調査（図1参照）
発生率：62.5%（平年25.2%、前年43.1%）
平年比：多（+） 前年比：やや多（±～+）
 - ② 7月の気象予報
気温が平年並で、並発生の条件（±）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項を参照。

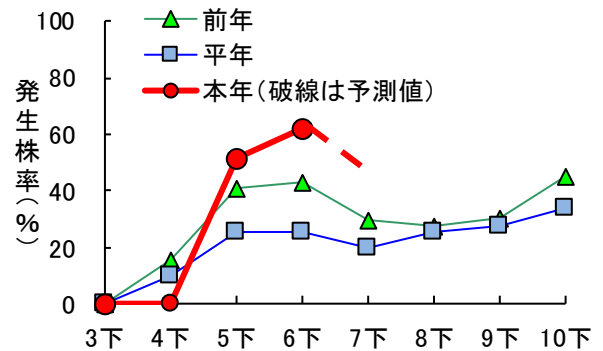


図1 アスパラガスでのアザミウマ類の発生推移

5. ハダニ類

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや少ない（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の実況
 - ① 定期調査（図1参照）
発生率：0%（平年1.3%、前年0%）
平年比：やや少（-～±） 前年比：並（±）
 - ② 7月の気象予報
気温が平年並で、並発生の条件（±）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項参照。

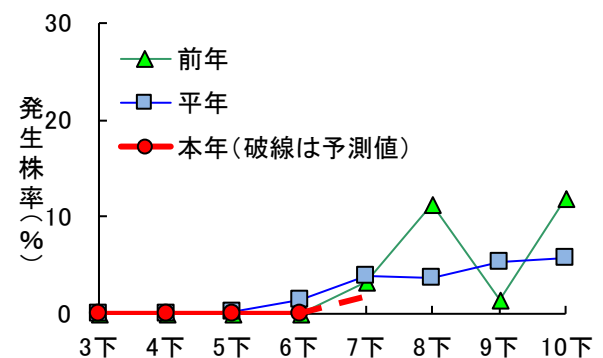


図1 アスパラガスでのハダニ類の発生推移

果樹全般

1. カメムシ類

【概要に戻る】

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 5月1半旬～6月4半旬までの誘殺量

①予察灯（図1参照）

平年比：並（±） 前年比：やや少ない（-～±）

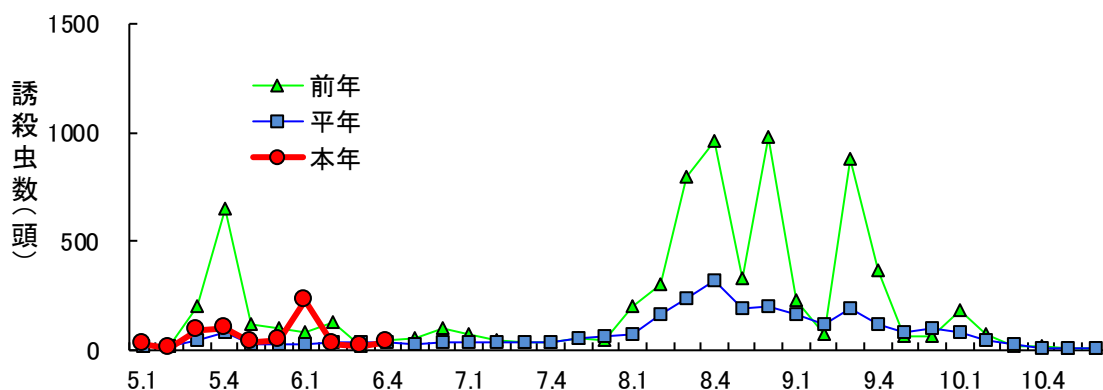


図1 予察灯（佐賀市、太良町（病害虫防除員調査）、小城市（果樹試験場調査））による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

②フェロモントラップ（図2参照）

平年比：並（±） 前年比：やや少ない（-～±）

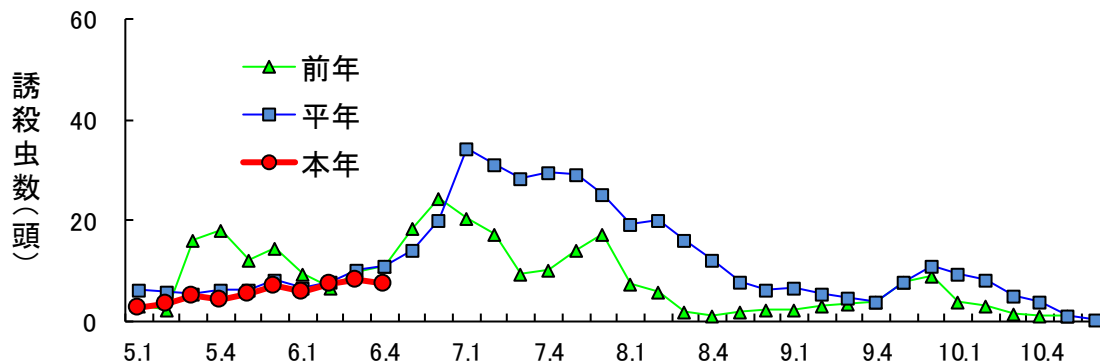


図2 フェロモントラップ（鹿島市、伊万里市、唐津市浜玉町、基山町（病害虫防除員調査）、小城市（果樹試験場調査）、唐津市鎮西町（上場営農センター調査））による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 果樹カメムシ類は、樹高の高い樹木に一旦飛来し、その後果樹園に飛来する傾向があるので、防風樹等は必要以上に高くなならないよう剪定をする。
- (2) 合成ピレスロイド剤等を散布するとハダニ類やカイガラムシ類の異常増殖（リサージェンス）を生じる場合があるので、これら害虫の防除対策も実施する。
- (3) その他については、特記事項を参照する。

カンキツ

定期調査：8圃場
調査日：6月17～18日



定期調査圃場の様子

1. かいよう病

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1、2参照）

発生葉率：0%（平年0.0%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

発生果率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

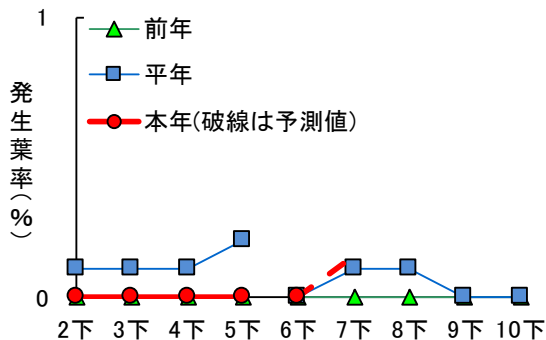


図1 カンキツかいよう病の発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

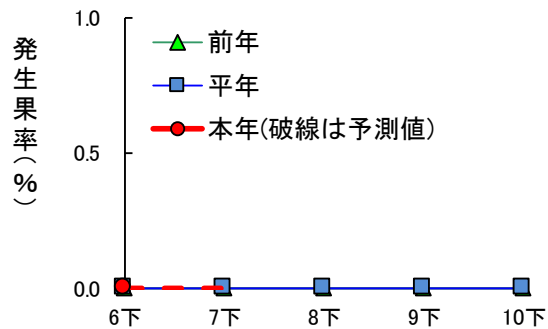


図2 カンキツかいよう病（果実）の発生推移

(2) 7月の気象予報

降水量が平年よりやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 前年に発生した園や風当たりが強い園、罹病性品種（ネーブル、はるみ等）の植栽園、新梢の伸長が遅くまで続く園（幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等）では、無機銅剤水和剤（クレフノン 200 倍加用）で定期的に防除を行う。散布間隔の目安は 20～25 日とする。

(2) 無機銅水和剤にマンゼブ水和剤を混用すると無機銅水和剤の防除効果が低下するので控える。

(3) 発病した枝や葉は伝染源となるため除去し、処分する。ただし、強剪定は枝を遅くまで伸長させ、本病にかかりやすい期間を長くするため行わない。

(4) 台風の襲来等強風雨が予想される場合は、襲来 7 日前～前日までに必ず薬剤防除を行う。

2. 黒点病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生果率：0%（平年0.6%、前年0.1%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 7月の気象予報

降水量が平年よりやや多く、やや多発生の条件（±～+）

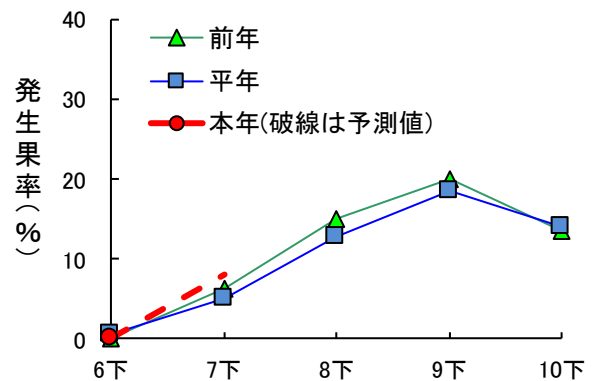


図1 カンキツ黒点病の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) マンゼブ水和剤散布後の次回散布時期は、積算降雨量が200~250mm（マシン油乳剤を6月に加用した場合は300~400mm）に達した時点を目安とする。ただし、同雨量に達しない場合でも、散布後1ヶ月を目途に次の散布を行う。
- (2) 枯れ枝や剪定枝は伝染源となるため除去し処分する。園内に残った切り株は伐根するか、ビニルの袋などで全体を覆って病原菌の胞子が飛散するのを防ぐ。

3. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生葉率：28.0%（平年14.7%、前年24.5%）

平年比：多（+） 前年比：並（±）

(2) 7月の気象予報

降水量が平年よりやや多く、やや少発生の条件（-~±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 低密度時（寄生葉率30%未満または1葉当たりの雌成虫数が0.5~1頭未満）からの薬剤防除を徹底する。
- (2) マシン油乳剤を7月以降に使用すると果実腐敗の発生を助長したり、糖度の低下を招いたりするので使用しない。
- (3) その他については、特記事項を参照する。

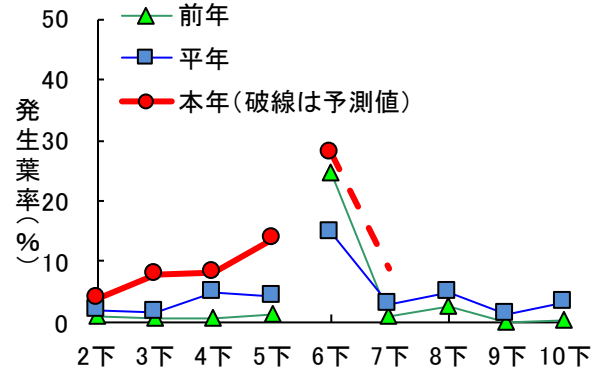


図1 ミカンハダニのカンキツでの発生推移
注) 5月下旬までは旧葉を調査

4. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生果率：0%（平年0.0%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

② 黄色粘着トラップ（図2参照）

平年比：やや多（±~+） 前年比：多（+）

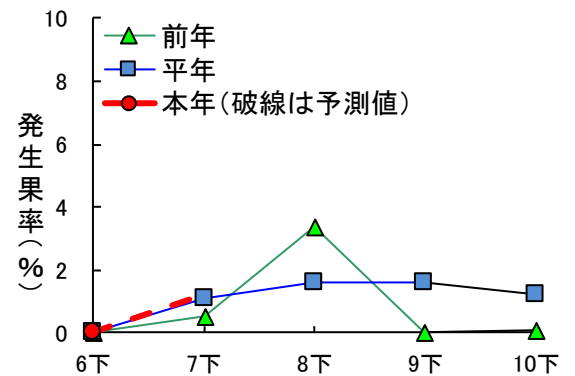


図1 チャノキイロアザミウマによる被害果の発生推移

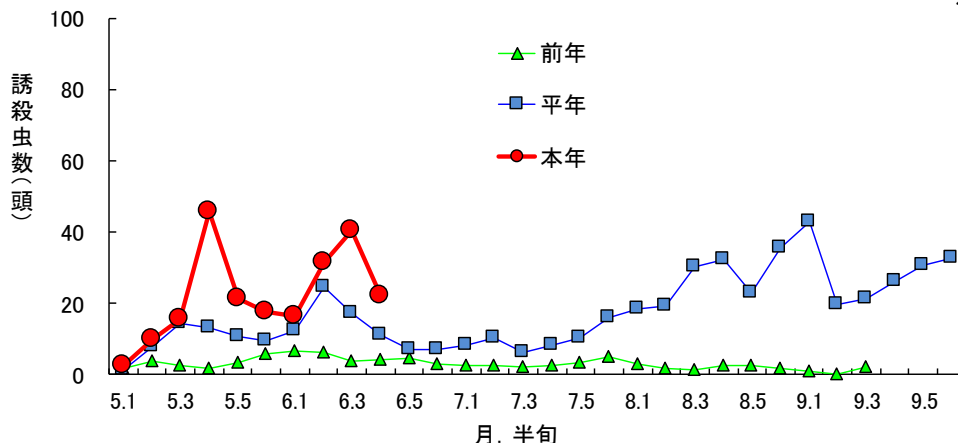


図2 黄色粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの誘殺数の推移（小城市 果樹試験場調査）

(2) 7月の気象予報

降水量が平年よりやや多く、やや少発生の条件〈一～±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本虫の発生が多い地域では、7月中下旬頃に薬剤防除を徹底する。
- (2) イヌマキ、サンゴジュ等は本虫の発生源となるため、防風樹として植栽している園では特に発生に注意し、防除を行う。

ナシ

定期調査 (6 圃場)
調査日: 6月21日



定期調査圃場の様子

1. 黒星病

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや少ない (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査 (図1、2 参照)

発生葉率: 0.5% (平年 2.5%、前年 0.3%)
 平年比: やや少 〈一～±〉 前年比: 並 〈±〉
 発生果率: 0.2% (平年 1.4%、前年 0.2%)
 平年比: やや少 〈一～±〉 前年比: 並 〈±〉

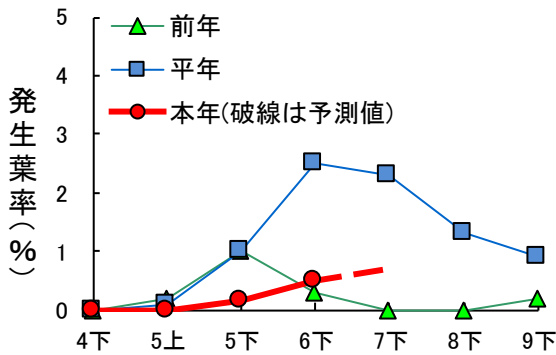


図1 ナシ黒星病 (葉) の発生推移

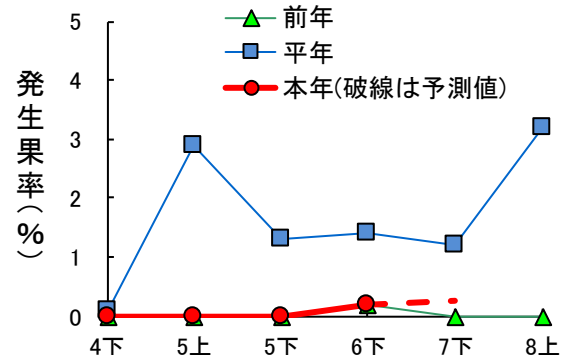


図2 ナシ黒星病 (果実) の発生推移

(2) 7月の気象予報

降水量が平年よりやや多く、やや多発生の条件〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発病葉や発病果実は伝染源となるため除去し、処分する。
- (2) その他については、特記事項を参照する。

2. ナシヒメシンクイ

1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや少ない (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①ナシ園地に設置したフェロモントラップ (図1 参照)

平年比: やや少 〈一～±〉 前年比: 並 〈±〉

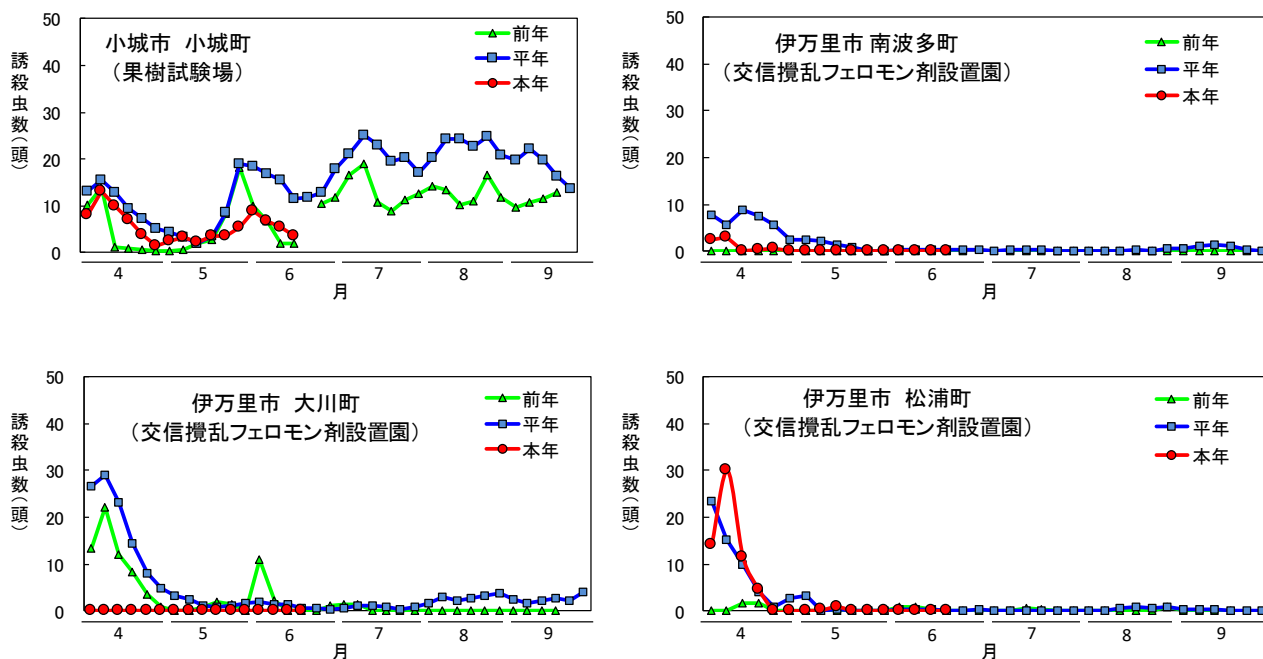


図1 フェロモントラップによるナシヒメシクイの誘殺数の推移
(果樹試験場、西松浦農業改良普及センター調査)

②サクラに設置したフェロモントラップ (表1 参照)

伊万里市3ヶ所での6月第1半旬から第4半旬までの誘殺数は前年よりやや多い (±~+)

表1 サクラに設置したフェロモントラップにおけるナシヒメシクイの誘殺数 (頭)
(西松浦農業改良普及センター調査) ※6月1~4半旬の合計値

地点名	H28年	H29年	H30年	R1年
伊万里市 南波多町	8	6	7	4
伊万里市 大川町	17	36	2	41
伊万里市 新天町	50	51	48	39
計	75	93	57	84

(2)7月の気象予報

気温が平年並で、並発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

- (1)7月以降は世代が混在するため、7~10日間隔で薬剤散布を行う。
- (2)交信攪乱フェロモン資材設置園においても、10~14日間隔で薬剤防除を行う。

ブドウ

定期調査 (6圃場)
調査日: 6月17~21日



定期調査圃場の様子

1. 黒とう病

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや多い (前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生葉率: 0.2% (平年 0%、前年 0.2%)

平年比: 多く(+) 前年比: 並(±)

(2) 7月の気象予報

降水量が平年よりやや多く、やや多発生の条件(±~+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発病部位は早急に除去し、処分する、

(2) 枝葉が徒長したり、晩期伸長したりしないよう、肥培管理に注意する。

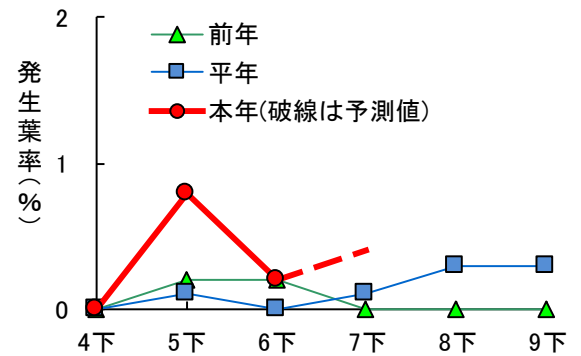


図1 ブドウ黒とう病の発生推移

2. ベと病

1) 予報の内容

発生量: 平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生葉率: 0% (平年 0.2%、前年 0.7%)

平年比: やや少(-~±) 前年比: 少(-)

(2) 7月の気象予報

降水量が平年よりやや多く、やや多発生の条件(±~+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 降雨前の予防散布を徹底するとともに、散布時には防除効果を高めるため、棚面の上からも散布する。

(2) ストロビルリン系殺菌剤(アミスターフロアブル、ストロビードライフフロアブル等)に対し耐性菌が発生しているため、本系統薬剤は本病の防除には使用しない。

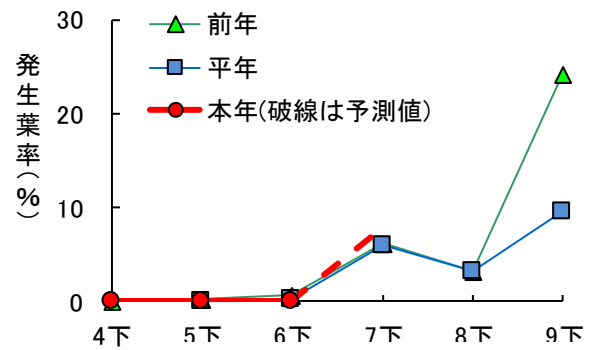


図1 ブドウべと病の発生推移

3. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量: 平年並 (前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 黄色粘着トラップ(カンキツのチャノキイロアザミウマ(図2)参照)

平年比: やや多(±~+) 前年比: 多(+)

(2) 7月の気象予報

降水量が平年よりやや多く、やや少発生の条件(-~±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 6月中旬~7月中旬頃は主要な加害時期であるため、薬剤防除を徹底する。

茶

定期調査：7 圃場
調査日：6 月 17～18 日



定期調査圃場の様子

1. カンザワハダニ

【概要に戻る】

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図 1 参照）
発生葉率：11.6%（平年 2.3%、前年 1.7%）
平年比：多（+） 前年比：多（+）
 - ② 7 月の気象予報
気温が平年並で、降水量が平年よりやや多く、
やや少発生の条件（-～±）
 - (2) 7 月の気象予報
気温が平年並で、降水量が平年よりやや多く、
やや少発生の条件（-～±）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項を参照。

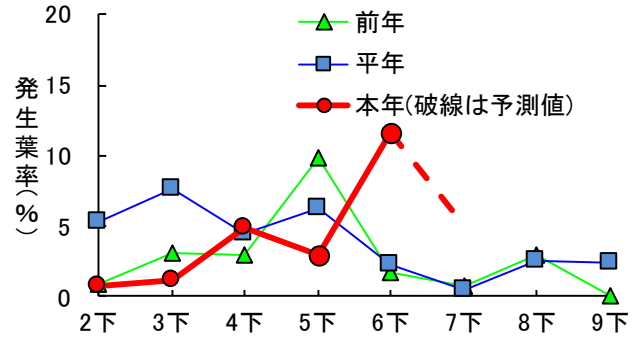


図1 カンザワハダニの茶での発生推移

2. クワシロカイガラムシ

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図 1 は雄繭の発生推移）
寄生株率（雄繭）：32.9%（平年 29.8%、前年 37.1%）
平年比：並（±） 前年比：並（±）
 - ② 7 月の気象予報
降水量が平年よりやや多く、やや少発生の条件（-～±）
 - (2) 7 月の気象予報
降水量が平年よりやや多く、やや少発生の条件（-～±）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 薬剤による防除は成虫に対して効果がほとんどないため、幼虫ふ化期をねらって防除を行う。
 - (2) 散布量を多くし、枝全体がぬれるようムラなく薬液をかける。

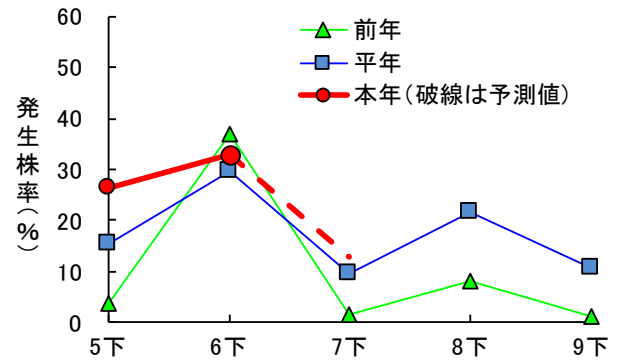


図1 クワシロカイガラムシ(雄繭)の茶での発生推移

3. チャノキイロアザミウマ

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図 1 参照）
20 回たたきおとし虫数：48.3 頭（平年 21.3 頭、前年 41.7 頭）
平年比：多（+） 前年比：並（±）
 - ② 吸引粘着トラップ（図 2 参照）
平年比：やや少（-～±） 前年比：並（±）

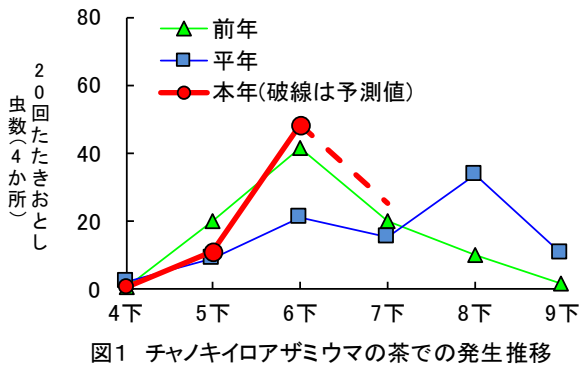


図1 チャノキイロアザミウマの茶での発生推移

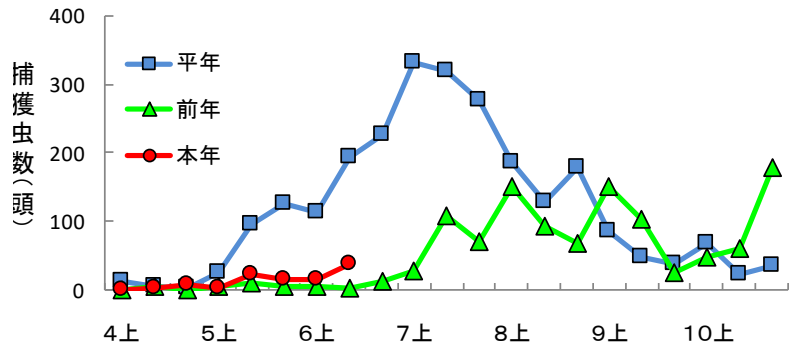


図2 吸引粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの旬別捕獲虫数の推移(嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

(2) 7月の気象予報

気温が平年並で、降水量が平年よりやや多く、やや少発生の条件〈一〜±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

4. チャノミドリヒメヨコバイ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い (前年より多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査(図1参照)

20回たたきおとし虫数：7.0頭

(平年3.0頭、前年2.0頭)

平年比：多〈+〉 前年比：多〈+〉

(2) 7月の気象予報

気温が平年並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

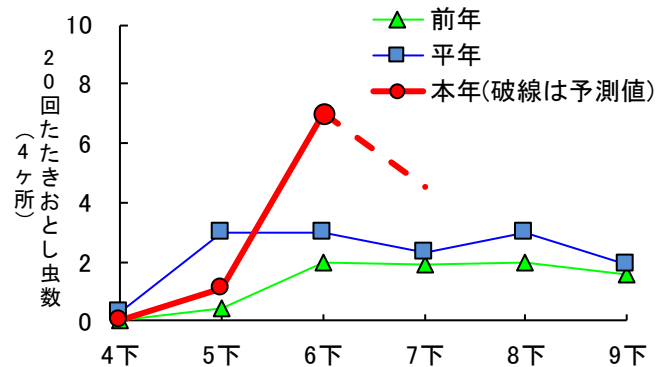


図1 チャノミドリヒメヨコバイの茶での発生推移

5. チャノコカクモンハマキ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い (前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査(図1参照)

被害葉数：1.3枚/m² (平年0.3枚、前年0枚)

平年比：多〈+〉 前年比：多〈+〉

②フェロモントラップ(図2、3参照)

平年比：やや多〈±〜+〉 前年比：やや多〈±〜+〉

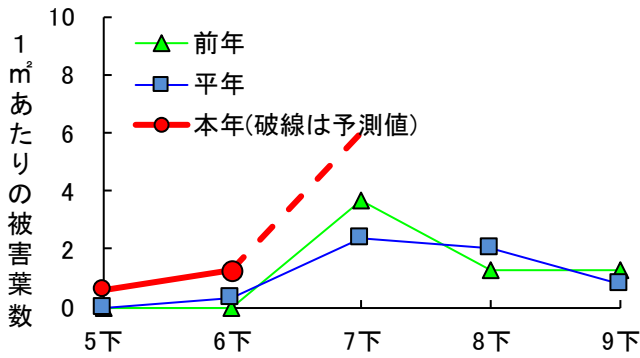


図1 チャノコクモンハマキの被害葉数の発生推移

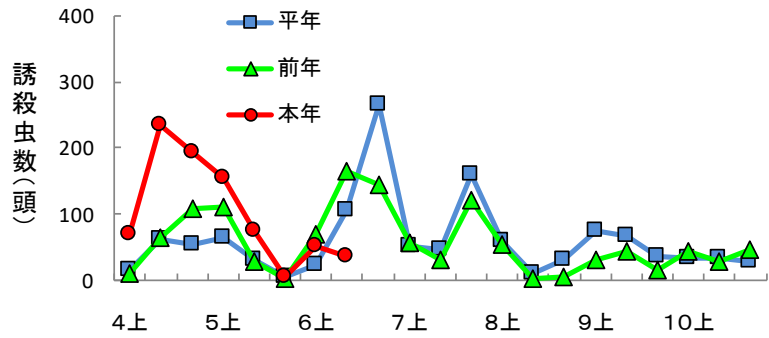


図2 フェロモントラップによるチャノコクモンハマキの旬別誘殺数の推移(嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

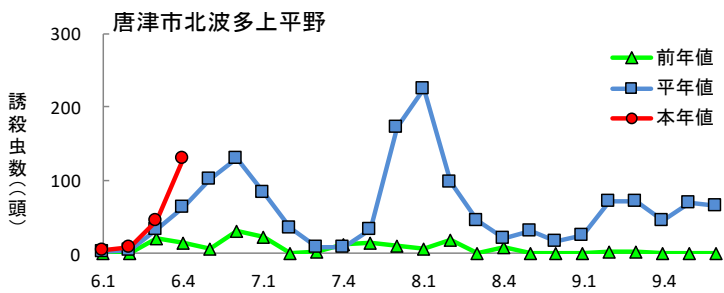
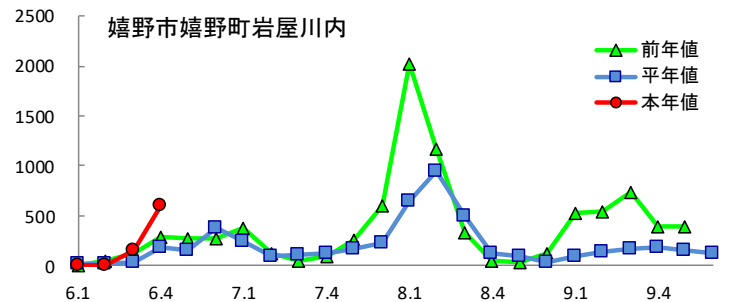


図3 フェロモントラップによるチャノコクモンハマキの半旬別誘殺数推移(唐津市・嬉野市、防除員調査)



3) 防除上注意すべき事項

- (1) 特記事項を参照。

6. 炭疽病

1) 予報の内容

発生量：平年並 (前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

- ①定期調査(図1参照、H30より5月調査追加)
 発生葉数：0枚/m² (平年1.3枚、前年0.1枚)
 平年比：やや少(一~±) 前年比：並(±)

(2) 7月の気象予報

降水量が平年よりやや多く、やや多発生の条件
 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本病は雨滴により新芽に伝染するため、開葉初期の予防散布を実施する。
 (2) 三番茶を摘採しない園は、二番茶摘採後に浅刈り等を行い、発病葉を除去する。

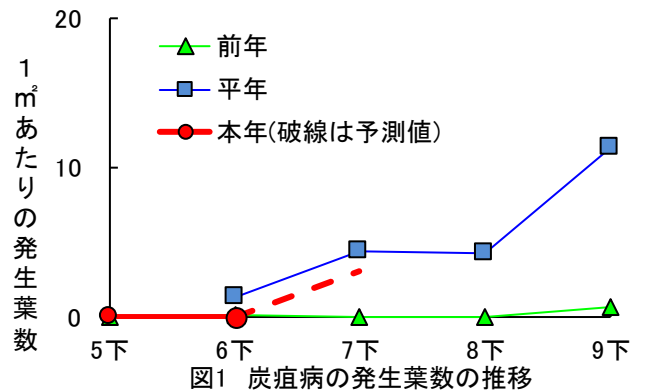


図1 炭疽病の発生葉数の推移

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部
 〒840-2205 佐賀市川副町南里1088
 TEL (0952)45-8153 FAX (0952)45-5085
 Mail nougyougi.jutsu@pref.saga.lg.jp